



セピア色の絵葉書世界

～古書店の風景 2～

イギリスのたいていの古い町と同様に、ケンブリッジも町の中心に広場(マーケットプレイス)があり、ギルドホールや市議会、穀物取引所、教会、裁判所などが取り囲んでいる。毎月1、2度この町にやってくる骨董市は、小学校の教室を一回り大きくしたばかりのギルドホール(フィシャーズホール)か、穀物取引所のいずれかであった。30店ばかりの雑多な店が毎回同じ場所を占めており、そこには古時計、古着、ガラス器、銀器、ミニチュア人形から真鍮製のバルブや用途不明のガラクタまでが商われていた。町のおじさん、おばさん風情の店主は、毛布をひざにかけてチョコバーなどをかじりながら黙々と客を待つのである(イギリス人はなぜあんなに辛抱強く、しかも?チョコバーがすきなのかといつも思う)。

この骨董市で古書を扱う店は案外に少なく、私の通っていた頃にはわずか1店であった。それも、背表紙がはがれかけたり手垢で黒ずんだ革表紙の小説類などをお義理に並べているに過ぎない。目玉商品はどうもダンボール数箱に詰め込んだ古絵葉書らしい。

とりとめもなく絵葉書を繰っていると、セピア色の背景からおやっと思ふ世界が浮かんでくる。かつて2年半のインド留学中に何度か訪れた町の風景や、ヒマラヤのふもととおぼしき高原、カルカッタやボンベイの、いかにもむしろが支配者、俺らがつくったんやといわんばかりの重厚な建物、馬上堂々の英国仕官像前の記念写真...。かすれたりにじんだりの文字が「1864年7月、マドラスにて」などとという頭書きとともに浮かんでくる。ただの旅行者かそれとも植民地の役人だったのか、ひょっとすると文人に身をやつた英国密偵だったか、夫と過ごすべくはるか異国の帝国領地に渡ってきた夫人なのか...

私には古絵葉書収集の趣味はない。しかし、インドや東南アジアの各地から送られてきた百数十年前の絵葉書の風景、書き手、「～にて」という送り地の住所、あて先名から、さまざまな想像が頭の中を駆け巡るのであった。誰が、いつ頃、どんな状況で、どのような気持ちでこの葉書を書いていたのか、この葉書の受け手はここに連ねられている文面をどう読んだのだろうか、この便りを運んだ帆船はどのルートをとってきたのだろうか...

「いつころの絵葉書をお探して?」「どの国の絵葉書に興味をお持ちで?」古書店主ならぬ古葉書屋の初老の店主はしばらくの間をおいて声をかけてきた。「お求めの時や国の絵葉書を次に持ってきますよ。」客が探していると思われる情報を的確にこの寡黙な店主は伝えるのであった。実際、ために、希望の時期と町の名前をいうと、次の骨董市の巡回日にはぴったりの葉書を持ってきてくれた。それからというもの、ケンブリッジに滞在した10ヶ月ばかりの間、骨董市を冷やかしく行くたびに、よそよそしくもなく上得意でもない顧客と店主の関係が続くのであった。

(図書館長 アジア文化学科教授
重松 伸司)

